

## スタンドグラス入りお墓

第 16 回で特別賞を受賞した宮城県仙台市泉区の西村 眞理さん（当時 59 歳）は、59 歳の若さで亡くなったご主人のためのお墓。グリーン色の墓石の中央を川が流れるようにゆるやかに湾曲したスタンドグラスが嵌め込まれ、墓石には「道 A way」の彫刻が施された芸術性にあふれるお墓。「杜の都、仙台市のシンボルともなっている定禅寺通りのケヤキ並木に置かれていても違和感のないお墓と、西村さんは自負する。



第 17 回では静岡県田方郡の土屋 栄一さん（当時 59 歳）が入賞した。娘が亡くなり、建墓することになりました。明るいイメージのお墓、いつでもお参りができるお墓にと家族全員で考えました。そこで墓石に灯りが入り、いつでも明るく照らされるよう、墓石中央をくりぬき、百合の花のスタンドグラスを入れることにしました。お参りするたびに、元気をもらえるお墓に仕上がったと思っています、と土屋さん。



第 21 回で入賞した宮城県仙台市太白区の志村 純子さん（当時 63 歳）は自作のスタンドグラス入りお墓。私たちのお墓は、東日本大震災で全壊してしまいました。今もまだ仮設住宅で不自由な思いをしている方たちがたくさんいますが、私の父の遺骨も菩提寺に仮住まいを余儀なくされてきました。父に安心して眠って貰いたいという気持ちが日に日に強くなり、市営霊園に見学に行った時のこと。今まで私の知らなかったいろんなお墓がありました。その中にスタンドグラスを組み入れてある素敵なお墓を初めて見ました。

私はスタンドグラス作りを習って二年になります。仮住まいの父にこんなお墓で安心して眠ってもらいた



い。今の私の生活を父に見守ってもらいたい。そんな気持ちから私の手作りのステンドグラスでお墓を作りたいと考えました。

ステンドグラスのデザインは父が好きだった花、中でも蓮の花にしようと決めました。自然光でのステンドグラスの透明感と引き立て合うようにお墓の石は黒で。でも蓮の花のイメージに合うように形は優しい曲面を使いたい。そう思ってこのデザインにしました。

想像していた以上の出来上がりにとっても嬉しく思っています。このお墓なら今私が毎日充実していることを、胸を張って父に報告できそうです。



第 21 回で入賞した宮城県仙台市泉区の青柳啓介さん（当時 49 歳）のお墓もステンドグラス入り。「墓地を購入してあるから、生前にお墓を建てておきたい。」と両親から話を受け、当初は「なぜ今そんな事を考えてほしくないし、考えたくもない。」と思いました。1年が経った頃、「両親の気持ちを一番に尊重すべきではないか。」と考えるようになりました。

年が明けてから、墓石をどんな風にするか家族で、話し合い、両親から「デザインはあなた達におまかせする。墓参りが楽しくなるようなものにしてほしい。」とまかされました。しばらく悩みましたが、墓地に何度も足を運び、周囲の風景を見ているうちに、木もれ日がふりそそぎ、穏やかで、やさしく包みこまれているような感覚になりました。まさに、両親の佇まいそのものでした。自然を愛する二人の姿とイメージを重ね、陽光にステンドグラスが映えるモダンな墓石を作ろうと決めました。四季折々にお墓を訪れるのが楽しみになりそうなお墓が建ち、満足のいく仕上がりに両親も喜んでいきます。

